

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

堀内 彩虹

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科

## 【研究題目】

他者の声を聴く経験に関する現象学的研究：身体行為と知覚の関係に着目した新たな聴取理論の構築

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、他者の歌声を聴く行為が聴く主体にとっていかに経験されるかを現象学的に分析し、そこで明らかにされたことをエナクティヴィズム(聴く主体によって知覚される内容には聴く主体自身の身体条件としての行為が影響を及ぼしているとする立場)の観点から聴取理論としてまとめ、提出することである。これまでの音楽聴取理論において楽器の聴取と歌声の聴取の差異を明確に分けて論じたものはなく、主に器楽で論じられた理論を歌声も含めたすべての音楽に適用させようとしてきた。しかし、これまでの研究によって、楽器の聴取と歌声の聴取は身体的に異なる経験プロセスを経ることが明らかにされており、歌声の聴取に特化した聴取理論が必要である。歌声の研究を音楽研究の枠組みのなかで限定的に行うのではなく、楽音であるという前提を一度捨てて歌声は「声」のひとつと考え、現象学や身体論における声をめぐると問題系の枠組みのなかで研究することで、声の聴取に特異な性質を含めた歌声の聴取理論を構築することを目指した。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

アルヴァ・ノエが著書 *Action in Perception*, 2004 (門脇俊介、石原孝二ほか訳『知覚のなかの行為』2010)を中心に提示した知覚のエナクティヴ・アプローチという理論を用い、歌声の聴取プロセスを知覚における身体的行為の介在という観点から現象学的に説明する。ノエは主に視覚を対象に論じているが、この理論を聴覚に応用する。エナクティヴ・アプローチとは、知覚への身体的行為の関与を示す知覚理論である。メルロ＝ポンティに代表される現象学的身体論に起源をもち、認知科学による知覚の運動理論やギブソンの生態学的アプローチにおける活動性をとりこんで発展してきた。エナクティヴ・アプローチは、知覚者が自らの身体のもつ技能や運動を使用し、知覚対象を「探索」することを通じて知覚内容を獲得する、すなわち知覚される内容は知覚者の所有する身体的活動によって成立(エナクト)すると考え、そのプロセスを説明する。

本研究では、同じ歌声を聴いても身体的違和感が聴き手によって現れたり現れなかったりすること、あるいはその現れ方が聴き手によって異なることに着目し、どう聴こえるか(知覚)ということと、どう／何をもって聴くか(行為)ということの関係性について分析する。これまでの研究発表ですでに歌声聴取へのエナクティヴ理論の適用可能性について論じてきたが、この研究では特に、歌う経験が豊富な主体(例：歌手や教師)が他者の歌声に対して一般的な聴き手が感じない身体的感覚(例：不規則な身体の震えや喉の違和感)を感じると事例に焦点を絞り、その背景に聴き手が聴く対象を「探索」するための身体的技能があることを指摘した上で、エナクティヴ理論を用いて知覚における行為の介在を説明する。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

本研究では、まず、エナクティヴ・アプローチが聴取主体の経験に根付いた身体感覺的技能が主体の知覚内容を規定するという前提に立って技能獲得および知覚プロセスを説明する理論であることを確認した上で、技能の獲得という点から歌声の発声と聴取について考察した。発声経験をもつ人なら誰でも持ちうる技能として、自分の声を聞きながら身体を操作して発声のありようを変化させる技能に着目すると、発声経験を通じて獲得されるこうした技能は、ノエが提示した「感覺－運動的技能」であるということができ、歌う経験のみならず、発声をめぐるあらゆる経験を通じて獲得されるといえる。この技能は、身体そのものから音を発する歌声だからこそ獲得可能な技能であり、器楽に関わる人の多くが獲得できる技能であるとは言い難い。次に、この技能が聴取における知覚内容にいかに関与を及ぼすかを考察した。聴取において他者の声に身体的違和感を感じるとする事例の分析を通して、器楽では現れにくい、他者の身体の細部に関わる身体運動的感覚として現れる知覚内容が、自己の発声経験に依拠した技能によって創出されるものであることが明らかになった。また、こうした身体の細部に関わる知覚が器楽では現れにくいことも身体技能と知覚との関係から説明された。さらに、歌声の聴取における身体技能に基づく身体行為と知覚との関係は、歌声以外の声の聴取にも適用可能であることが示された。